Saturday, March 25 2017

芭蕉会議　論文を読む会　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　谷地元瑛子

１。前段： オーストラリア言語文学学会（AULLA)主催

　　　　　　Love and the Word （December, 2016)参加の経緯

 2. 発表原稿： Love and the Word in Renku Cosmology

 時間は20分、聴講者に俳文学研究者は皆無、この条件下で

　　連句の魅力を伝えるためにスピーチ原稿を用意した。ここにその和訳を示す。

連句宇宙観が見せてくれる「愛と言葉」の在り処

ご紹介ありがとうございます。私が二ヶ国語連句に魅せられてきた根っこには横須賀という軍港の街に生まれ育ったことがあると思います。第二次大戦後、横須賀は日本帝国海軍の要塞から米国海軍の極東基地に変貌していったのです。その中に生まれ育ち、

言語を相対化して捉える癖がつきました。高校生になると言語か文学か、どちらを専門にするか悩み、言語を選びましたが、腑に落ちない思いは残りました。

そんな中２０年ほど前、「伊賀上野での連句興行に外国の詩人が参加するので連句通訳に来て欲しい」という声がかかりました。私は晶子や子規を英訳した米国人ゴールドスタイン教授とペアになって伊賀上野の連句会に出ました。お捌きは連句療法を実践しておられた精神科医、浅野欣也先生。１５人ほどの関西の連衆は古典教養にもとづく含蓄ある句を矢のように出されます。句群からお捌きが治定する句を必死に訳し、生煮えの拙訳を読んでゴールドスタインさんの考えた絶妙な付けを今度は日本語に直すという仕事です。立体的言語サーカスともいうべき座の熱が私を捉えました。それ以来連句を世界に広めたいという思いを持つようになり、ついに言語と文学の両方に関われるライフワークを見つけました。自己紹介はこれくらいにします。

さて俳句は日本からの輸出品の優等生と言われます。けれど俳句だけでなく、その母である連句も知れば、俳人としてさらに磨きがかかるでしょう。

近代俳句と違って、座で作る連句に唯一無二の著者というものは存在しません。実はこの文芸こそ日本文化を体現しています。長く日本の津々浦々で愛されてきたのは連歌連句です、俳句はほんの１５０年足らず前に連句から独立したのです。俳句の隆盛と裏腹に明治以後絶滅の危機に瀕した連句を近代文学という偏った文学理解から解放する時が、今、来ていると私は信じています。

連句は座に着いた参加者が即興で互いの句につけあって詠み進みます。すぐ隣の句にはリンクし、一つ置いた句からはシフトするという原理があります。これによりつじつまのあったストーリー的流れを断ち切ります。これは俳句で使われる切れに通じると思います。こうしてつけ進むと、音楽か、前衛映画のように響くアンチ・ナラティブの詩が生まれます。付け心はどこか無意識の動きや夢と似ています。季節が設定されていても、ちょうど夢の中のように流動的です。もし別のエピソードが入り込み、そのあと、無季の句が詠まれて場を一新すれば、そのあとは自然の巡行通りに季節を進める必要はありません。連句一巻の中で繰り返していい言葉は、月、花に限られ、同じ単語を避け、一歩も戻らず、常に新しい領域を開拓することが連句の根本です。

連句はどう命と愛につながるのか

1000年になろうかという間、多くの連歌連句が巻かれました。座に連なった人々は「生きるとはどういうことなのか」と言う問いを胸の奥にしまい、座という磁場で前句に向き合い、前句を自分のものにするほど深く鑑賞した上で、それに続く付けを案じます。付けとは常にすぐれて個人的、創造的な営為です。その度に新しい付け方が生まれているとも言えるでしょう。付け方いろいろ、うち添え、映り、響き、などと分類することもありますが、発句、脇句が一章になって連句が出発するのです。

長い実作の累積から、連句一巻の型や約束事が浮かび上がり、共通の理解になってきました。一巻とは発句で始まり多くの付け句を挙句でまとめたひとつながりの詩ですが、魂の気息が吹き込まれた渾然たる一つの世界を表出することを目指します。

初心者は実作の座に入るのがいいか、それとも勉強が先か？は鶏と卵の関係です、本を読んで型やルールを覚えるのは煩瑣でしかもすぐに役に立たない。まず実作の座に座ることを勧められても、専門用語が飛び交い、不安になる。こういう事情で、連句をする人がなかなか増えないのだろうと思います。

けれど一度、連句の醍醐味を味わえば、数あるハードルが嘘のように消えて無くなります。 連句の醍醐味、それはオーガニックな言葉のやり取りから生まれます。柔らかく人間的な場が創出され、静かさの中に快活な笑い声が起こる命の熱ある場所、（座とも言います）（相撲の場所にも通じる）が生まれます、そこに共にあることから体と心にじわりと伝わる滋養は他では得難いものです。近代以降、言葉は人間同士がつながるためよりも、ディベートと呼ばれる討論の道具であったり、物事を分けて整理するためのインデックスだったり、法であったり、身にまとい人を排除する鎧やお面を作る堅固な部品だったりしています。

連句の場での言葉は健康な呼吸をしているのです。自然なつながりのできるように初期化された本来の言葉とも言えましょう。連句をせずとも、その場で遊んでいる子供は体で場の柔らかさ、ポジティブな空気を感じるものです。

それでは具体的な話をします。単なる連想遊びとは違う境地に到達できかる理由は句と句の行間の働きです。ここには前句が引き起こした響きやうねりが残っています。前句の中の言葉たちがかもし出した言葉にならない匂いも漂っています。行間を覗くと深い淵がある場合もありです。想像を掻き立てられます。そこに身を置き、前句の世界を敷衍したり、変形したり、トリックで迂回したり、立体的に多層的に連句の流れを進めるのです。前句への愛が基本とはいえ、つい前句と同じ想像の籠の中から見繕って句作りするのはいけません。前句を説明する句は避けます。それは一つ一つの付け句はどれも大切にすべき独自の声だからです。連句が共依存のもたれあった戯言になるか、峻烈な言葉の芸術になるかは志にかかっています。

愛というテーマに沿って言いますと、連句には死せる詩人を生き返らせる愛のわざがあります。何百年前に書かれた発句を２１世紀の今日の連句の座の発句にして読み進める脇起こりという手法があるのです。（昨年一年は蕪村生誕300年の年でした。蕪村をお招きして四歌仙を巻きました。）

Primavera, 歌仙プリマベーラの試み

歴史を通じ、連句好きが高じてパートナーが見つからなければ独吟する人はいました。誰の心にも棲む様々な側面に一つづつ声を与えて句を作り編み進めば、連句の楽しさ、カタルシスが味わえます。過去の自分と連句を巻いた蕪村は相当な連句好きだったと思います。

さて杉田久女の句集を読んでいて、一つのアイデアが浮かびました。

〜〜代表的とされる句ばかりに注目するのではなく、一生を俳句に捧げた久女が詠んだ句を歌仙の形に編集して多くの人に読んでもらえれば意味があるのではないだろうか？　久女は西洋文学を翻訳でいち早く読む一方、万葉言葉を自分のものにするほど古典に親しみ、かと思うと、母として妻としての場面場面の句、幼時の追憶の句も多い久女です。発句は、私が芭蕉会議の句会に出して

一票いただいた〜プリマベーラ日比谷に翡翠の鳥が来る〜に

しよう。あの日、日比谷公園の池に皇居から飛んできた翡翠は

詩の国から私の胸に飛び込んできた久女だったように思える〜〜

Primavera—
a flash of jade
alights in Hibiya eiko　　（春）

原句でカワセミという単語を使わなかったように英語でも

kingfisherという単語を使わずヒスイの輝きとしました。

動詞に[留る]を使ったので鳥とわかります。あの日沢山のカメラマンがその瞬間を待っていました。

この句の脇には久女が、娘光子の婚礼に小倉から東京に出てきた際の句と若いころ読んだ類句を合体させて作りました。久女は俳人ですので短句は読んだことがありません。できるだけ意味を変えずに５７５を７７にするという暴挙です。

プリマベーラ日比谷に翡翠の鳥が来る　　　　　 eiko

 　　楽しかるべきまどゐ春の夜　　　　　　hisajo

\*原句は以下の二つです。

　　　春の夜のまどゐの中にゐて寂し　（初期の句）

　　　蒸し寿司のたのしきまどゐ始まれり　（光子婚礼の日）

spring night, feeling alone
in the happy circle　　　　　　　　　　hisajo

発句が昼まで脇が夜になってしまいましたが、心の中の一景とします。久女は寂しがり屋でした。

三句めは第三と言って、動きのある丈高い句が求められるのですが、ここでは久女の句をそのまま使いたいので体言止めです。

〜〜〜庭の芽ぐむらん〜とすることを控えました。

 土濡れて久女の庭に芽ぐむもの　　久女

such wet earth

Hisajo’s garden is about to
break into bud

英語では〜めぶかんとす~という第三にふさわしい動きの句となりました。

こうして久女の世界を表出させてゆく独吟ですが、展開には

歌仙のきまりを適用してゆきます。作品はプリントにしてあります。

ここで連句マトリックスを紹介します。連句コスモロジー、すなわち、連句という文芸が持っている宇宙観を知っていただきたいのです。マトリックスのプリントをご覧ください。

連句は自然界と人間界のバランスを重んじます。連句を巻くことで、人として生きてゆく世界、生きてゆく作法を学ぶようになっていた時代が長い日本です。

自然界の時空、山、海、川、そこに生きる動物、植物、その中の私たちの立ち位置、すべてを包む月光、それらを一巻の中に詠み込むのですが、自然句の頂点は月と花とされています。人間界のテーマも、生活道具、芸術、宗教、世相とありますが、その頂点は愛です。

古代から脈々と伝わってきたの日本人の物の見方感じ方が反映されています。常にバランスと調和を大切にし、人と人のつながりを

重んじます。

次にこれらの宇宙観を顕現させるため、それぞれの題材をどう詠みこむかについて、古来言われている心得、私の実践などを紹介します。作品を読む際の参考になさってください。

１。歌仙３６句の中に二花三月の定座があります。詩の流れの

　　ピークとなる５カ所がこれら五句の指定席なのです。そもそも

　　長句と短句の生む波にのった韻文の美しさななければピークも

　　生きてきません。

２。すべての付けは前句の余韻から生まれます。この独吟に当たっ

　　て、久女の句を本人以上に深く味わうように努めました。

　　全編通して、潮の満ち干が感じられ、一つの巨大な詩

　　として読者に届くことが目指すゴールです。

３。久女の原句を短句にする際、できる限り、

　　詩の内実を変えないようにしました。それを優先条件として

　　付け句を選びました。短句では到底伝わらない俳句を

　　短句の場所に選ぶことはしていないつもりです。

４。久女は心を焦がして生きた詩人ですが、同時に主婦であり

　　母であり、絵と国語を女学校で教えた非常勤講師でした。幼児

　　沖縄と台湾に住んだ元祖帰国子女でもありました。

　　日本が近代化と言われる歴史の波にもまれ、技術革新が起こり

　　社会がみるみる変化し、やがて戦争に巻き込まれていった

　　時代を俳句俳句と生きた人です。この独吟歌仙がそんな一生を

　　垣間見させてくれることになればと思います。

それではここでアリスさんにバトンタッチします。アリスさんは

最近、メルボルンのMonash大学より久女の研究で博士号を

受けておられます。

＝＝＝＝＝＝＝

話題として＊英語詩として通る俳句集の刊行

　　　　　＊聴講者との連句実作

　　　　　＊愛と言葉という学会に出された論文いろいろ